

招致のためのデザインって誰がしているの？

立候補ファイルとは、IOCから正式に立候補都市として認められた都市が、大会計画に関する17テーマの質問に対しての回答を表示する書類。開催都市決定の鍵を握る重要な提出物である。2015年の東京オリンピックの立候補ファイルは、ロゴマークに使用している「結び」を意匠させる漢字象に収められている函入りの亀甲織り冊子。三冊・全600ページ弱というボリュームながら、和紙でできた紙面はめくるのも心地良く、日本の印象を手触りからも伝えようとしているようだ。

制作を担当したのは新村デザイン室の新村則人。「最初のオリエン時に『日本=和紙』が浮かび、和紙、漢字象包みという発想がそのまま採用になりました。でも印刷会社に最初『和紙は難しい、和紙じゃなくて時間的に無難』といわれて。悩んで、まだ和紙だと決まらないうちから、和紙工房の阿波和紙さんにお願ひして印刷に適した和紙の研究を密かに始めたんですよ。一時は印刷会社の買集した和紙の紙で妥協しそうだったんですが、最終決定権を持つ石原都知事が『和紙でいこう』といってくれたおかげで、実現できました」と話す。

最大の難関は、和紙の印刷品質を上げること。インクの滲みや裏写り、色のくすみなどの問題が印刷会社やコンサルタントから指摘されていた。インクが滲まず、裏写りのしない印刷品質を実現するために、和紙の裏にスミや顔料を敷いてみるなど裏写りを防ぐための試行錯誤を繰り返したが、いずれも色みが沈んでしまう。かといって厚い和紙にすると、和紙ならではの柔らかさが出ず、冊子も分厚く重くなる。そこで和紙工房と協力し、潔白に手間をかけ、更に白さをアップさせたオリジナルの和紙を開発することで解決した。

クライアントである東京都やコンサルタントの側に立ち、中身のデザインのみではなく、手触りまでも追求。万国共通言語としての「日本」を表すファイルは、仕事として非常に満足のいく出来となった。(文/真和透)



ページを開くと、扉に各章のテーマを印象づける写真とタイトルが、見開きで効果的にレイアウトされている。



函入りの全三冊の立候補ファイル。紙かぶりのある日本特有の質感をデザインに落とし込んでいる。



招致エンブレム(左)はGKインダストリアルデザイン、仲久庵事務所が担当。ポスター(中央)などの招致物は電通。上記の立候補ファイルの創案となった招致ファイル(右)は松下社がデザインを担当した。